ISSN 2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第69号 2020年9月15日

編集・発行『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人 冨岡勝・谷本宗生）
連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 冨岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム ZOOMを活用したオンライン授業の紹介	八田 友和	2
コラム 静岡大学70年周年誌の刊行・学生寮(雄萠寮)小史の掲載のご報告	猪瀬 貴大	7
逸話と世評で綴る女子教育史（69） 女子文芸学舎から千代田高等女学校へ	神辺 靖光	12
1986（昭和61）年度の大東文化大生の就職状況 －「大学案内」（1988年）から －	谷本 宗生	17
学校資料の教材化を模索して⑬ －「校門」を題材とした小論文指導を事例に－	八田 友和	20
明治後期に興った女子の専門学校（24） 東京女子医学専門学校認可への苦しい道のり	長本 裕子	24
カレッジノベルの研究への道（15） ：久米正雄「受験生の手記」（6）	吉野 剛弘	29
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（24） ―コロナ禍における大学アーカイブズの現状①―	田中 智子	34
「遠隔授業」準備メモ（6）	冨岡 勝	37
『久徴館』のめざすもの（6） 北条時敬の演説「慎独ノ学問」(上)	小宮山 道夫	43
体験的文献紹介(17) －藩校・郷校・寺子屋の研究 －	神辺 靖光	47
刊行要項（2015年6月15日現在）		51
短評・文献紹介		52
会員消息		54

コラム

ZOOMを活用した オンライン授業の紹介

八田 友和（はった ともかず）
（クラーク記念国際高等学校）

1. はじめに

2020（令和2）年4月、新型インフルエンザ特別措置法に基づき、7都府県に緊急事態宣言が発令された。筆者の勤務校においても、休校措置がとられ、オンライン授業に向けての準備が進められた。具体的には、生徒との連絡ツールとしてslackを導入し、授業ツールとしてZOOMを導入した。筆者も、他教員からアドバイスを受けながら、「受験日本史」「現代社会」「小論文」の3科目を担当した。以上を受け本稿では、筆者が担当する授業（受験日本史）で行ったオンライン授業についてその概要を整理・提示することで、望ましいオンライン授業の在り方について模索したいと考えている。

2. 授業実践の概要

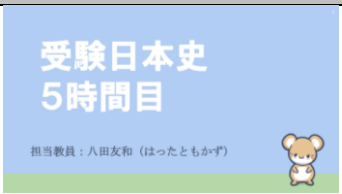
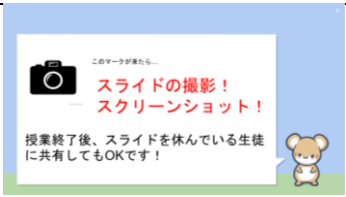
本実践の概要は次の通りである。

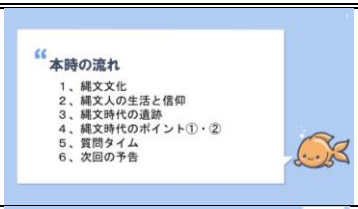
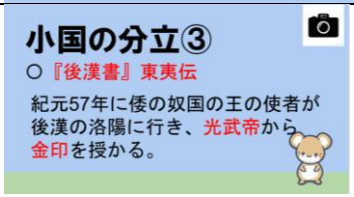
（1）科目名：日本史B
（2）期　間：2020年5月13日（水）2・3時間目
（3）対　象：全日型コース 2年A組（23名）
（4）場　所：クラーク記念国際高等学校 芦屋キャンパス
（5）担　当：筆者
（6）授業の流れ・方法

授業の開始時は、ZOOMの画面をONにして、音声をミュートにした状態でスタートする（ZOOMのミーティングを予約する際に、これら全ての設定を完了させる）。最初に号令を行い、出欠確認を行う。出欠確認では一人ひとりの名前を呼名する。呼名された生徒は、マイクのミュートを解除して返事をする。全員の呼名が終わった時点で、授業内容

に入る。なお、教員・生徒ともに、なれないオンライン授業であるため、万が一を考え、授業終了時にもう一度呼名している。筆者の授業では、前半 35 分を学習内容の解説にあて、後半 15 分をノートにまとめる時間としている。前半部分では、筆者がパワーポイントを用いて、授業内容の解説を行う。その際、随所で発問や質問を組み込むことで、生徒が参加しやすい環境を整えた。解説が一通り終わったのち、授業で用いた全てのスライドを 10 秒間隔で流し、取り忘れたスライドをスクリーンショット・撮影する機会を与えた。以下、筆者の授業で使用したスライドのうち、特徴的なスライドを概要とともに紹介する。（表1）

（表1）授業で使用したスライドとその概要

スライド	概要
	まず、表紙のスライドを作成した。筆者の勤務校では、授業がはじまる5～10 分前から、ＺＯＯＭの接続等の確認・準備を行っている。その際、左記のような写真を固定しておくことで、授業科目名や担当教員名等の確認をすることができる。生徒を安心させる一つの工夫として毎授業準備した。
	授業時に、ノートを書く時間やかける労力は人それぞれであるため、左記のスライドを提示した。筆者の授業では、授業で用いたスライドの撮影・スクリーンショットを歓迎している。また、休んだ生徒への共有も許可している。ノートをまとめる際、役立ててもらえるようにしている。写真を撮る際は、人の顔が映らないように配慮することを義務付けている。

	授業の最初に、必ず授業の流れを確認している。先行きが不安だと落ち着かない生徒もいるため、事前に本授業で進む範囲や内容について、その概要を提示している。
	スライドの右上にカメラのマークが出ると、スマートフォンでの撮影やスクリーンショットを促している。スライドの赤字は教科書の太字と合致している。生徒が見ている画面がパソコンのような大きな画面の場合もあれば、スマートフォンのように小さな画面の場合もあるため、文字は大きな字で表記している。文量もなるべく少なく抑えるようにしている。
	文字ばかりのスライドでは、見ている生徒も疲れてしまうため、２枚に１枚は画像を配置するようにしている。資料を提示する際は、その資料から読み取ったことや、わかったことを発表してもらう場を設けることにも留意した。
	左のスライドは、旧国名を考えるクイズである。写真を提示して、その名称を答えてもらうことで、旧国名を特産物や有名なものとセットにして覚えてもらうことを目的としている。このように、解説だけでなく、クイズや雑学などを随所に組み込むことで、興味・関心を惹く工夫を行った。
	最後に質問タイムを設けることで、疑問に思っていることを解消する場を設けた。生徒からは、「３枚目のスライドをもう一度見せて下さい」「この部分を詳しく教えてください」など、様々な質問や感想が寄せられた。口頭で質問させる方法もあるが、ＺＯＯＭのコメント機能を活用することで、普段質問しにくい生徒

	も質問しやすい環境づくりを行うことにつながった。

（筆者作成）

4.考察

ここでは、オンライン授業をして気づいたこと・感じたことを箇条書きにして整理する。

・生徒と直接正対しているわけではないため、生徒について得られる情報が少ない。また、生徒の興味・関心を惹くことやフォローがとても難しい。
・生徒の自宅におけるインターネット環境やICT機器の有無などに関して、あらかじめ調査を行う必要がある。
・スマートフォンから参加している生徒もいれば、タブレット、パソコンから参加している生徒もいるため、画面の大きさに違いがあることを理解したうえで授業を行う必要がある。
・ZOOMならではの、声量やテンポ等に気を付ける必要がある。
・オンライン授業では、全員がマスクをせずに参加できるため、表情が読み取りやすいこともある。
・登校に難を感じている生徒にとっては、参加しやすい環境にある。一方で、画面上に自分の顔を出すことに抵抗がある生徒も一定数いた。
・画面共有すると、スライドと生徒の顔を同時に見ることが困難になるため、2台パソコンを準備すると良い。（生徒側も一台の端末だと参加が難しい場面がみられた）
・ZOOMでパワーポイントを使用する際、アニメーションを多用すると、動作が遅くなるケースがあった。

・板書する際、パソコンのカメラがうつす範囲が狭いため、たくさんの情報量を板書にまとめることが困難であった点（黒板全体を使用することができず、板書できるスペースが限られてしまう。）
・在宅勤務時に授業を実施すると、他教員が近くにいないため、トラブルが発生した際、対応に苦慮することがある。

5. さいごに

本稿では、ZOOMを活用したオンライン授業の事例として、日本史Bの授業で行った原始・古代史学習について紹介を行った。

新型コロナウイルスの感染拡大については、2020 年の冬頃に第二波が来ることが予想されており、油断は許されない。今後も継続して、オンライン授業の在り方について模索していきたい。

【謝辞】

本研究を行うにあたりまして、クラーク記念国際高等学校の石川眞椰氏にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

【参考文献】

・老川慶喜ほか 2016『詳説日本史 改訂版』山川出版社
・奥田晴樹(編)1991『改訂版 詳録新日本史史料集成』第一学習社
・八田友和、山内敏男 2019「分布図から時代の特色と転換を理解する原始・古代史授業開発－小単元「残されたモノから古代社会のしくみを探れ!」を手掛かりに」『兵庫教育大学学校教育学研究』第 32 巻、pp.143-152
・クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス公式ホームページ
（最終確認 2020 年 7 月 25 日）
https://www.clark.ed.jp/kinki/ashiya/

＊このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。

コラム 静岡大学 70 年周年誌の刊行・学生寮(雄萠寮)小史の掲載のご報告

猪瀬（いのせ） 貴大（たかひろ）
（静岡大学卒業生）

このほど、『創立 70 周年静岡大学の 10 年 2009-2019』（下図：表紙、以下 70 周年誌）が刊行された。静岡大学はこれまで、10 年、25 年、50 年、60 年、70 年の節目にて記念誌を刊行しており、静岡大学大学文書資料室ホームページにて順次公開している（末尾に URL 記載）。

当 70 周年誌は表題の通り、静岡大学の 2009 年から 2019 年の 10 年間のあゆみを詳細に記述している。筆者が印象的だったのは、「学生の自主的活動」について全頁の 10%弱を割いて取り上げている点である。部活動、サークル、表彰者などの紹介を通して、学生の姿を記録しようとしている。拙稿「学生寮小史」を掲載いただけたのは、そのような「学生の自主的活動」の一貫としてである。

「学生寮小史」に示されているのは、筆者が 2018 年 9 月まで在籍していた雄萠寮の黎明期とやや消沈しつつある現在に焦点を当てて、自治意識停滞と寮生減少の流れを大観した、いささか憂鬱な歴史である。ほとんどの記述は寮所蔵の自治会資料を基にしている。特筆しておきたいのは、旧制高校以来の「仰秀寮」を単線的に引き継いだ寮と

いう認識と誇りはあくまで後年に形成された、との指摘である。

ところで、「学生寮小史」は初めから70周年誌への掲載を意識して書いたものではなかった。雄萠寮が 2019 年にて 50 周年であり、そのことを筆者が発信しなければ現役寮生の誰もが知らないまま過ぎてしまいそうな状況であったため、筆者の関心に基づいた寮史のあらましを作成し寮内に掲示した。縁あって、静岡大学大学文書資料室の山本義彦先生（名誉教授）に、その原稿の 70 周年誌掲載をご提案いただいたのである。山本先生、並びにこの度本稿にてそれをご紹介できる機会を設けてくださった富岡先生に、この場を借りて深く感謝申し上げたい。

70 周年誌掲載にあたり寮内向けの原稿から書き改めてはあるが、とどのつまり、雄萠寮以外の同時期に誕生した寮についてほとんど触れることはなく筆を置いている。これは筆者の怠慢であり、大学の 70 周年誌である以上、本来全学的な視点から学生寮について論じるべきであることは、文中の山本先生のご指摘にある通りである。また、雄萠寮史と割りきるにせよ、過去の寮生から聞き取りをおこなうなど、正確な記述のためにはさらなる調査が必要だった。

とはいえ、この「学生寮小史」にも一定の意味はあると考え、それについてここで整理しておきたい。雄萠寮は静岡大学の 4 つの学生寮のうち、特に興味深い歴史を有していると考えている。

第 1 に、雄萠寮は 3 つの前身寮を持つ。表 1 と 2 を参照されたい。雄萠寮は統合移転期に開かれた寮としては最も遅く、仰秀寮、小鹿寮、遅れて遷喬寮の最後の寮生の受け皿となっている。このため、旧寮の影響を強く受け、そのバランスの上に歩んできた寮と言える。対して、例えば統合移転の早い段階に建設された片山寮は、移転後の新校舎における入学生が多く入寮し、純粋に新しい寮として開かれた趣きがある。

第２に、静岡県学生寮自治会連合の本部が置かれていた。このことは、静岡県内において雄萠寮が学生寮自治会活動の中心を担っていたことを意味するだろう。寮内には 1960 年代以降の旧寮時代からのビラ類が豊富に残されており、大学文書資料室内の資料を補足し新たな資料群を形成できるものと思われる。

ところで、70 周年誌には築 50 年を超える既存寮の建て替えが迫っていると記したが、2020 年現在学生寮の建て替えはひとまず延期されていると聞いている。浜松医科大学との一法人化・再編の動きをはじめ、大学が様々な懸案を抱えていることが背景にあるそうである。

実現が遅れているのは、大学アーカイブズの整備拡充についても同様と言える。今日静岡大学は、2 つのアーカイブズ組織を有している。1 つは全学組織で名誉教授山本義彦先生が運営に携わる「大学文書資料室」（2013 年～）であり、1 つは旧制静岡高校・新制静岡大学文理学部/人文学部の関連資料を所蔵する人文社会科学部の「大学アーカイヴズ委員会」（2017 年改組、母体「大学アーカイヴズプロジェクト」2009 年～）である。両者とも、人的・物的・予算的に十分な配慮をされているとは言えないのが現状らしい。大学アーカイブズの重要性が、関係者に十分理解されていないことが一因のようである（山本の「あとがき」参照）。

「多くの大学アーカイブズは、大学沿革史編纂室を前身とする[1]」とのことであるが、静岡大学においては 1999 年の大規模な 50 周年史編纂も、大学アーカイブズ設立の契機とはならなかったようである（ただしアーカイブズの展望の下に、同史編纂においてもデジタル保存を構想され、ある程度実践されていたと聞く）。

引き続き、静岡大学における大学アーカイブズの整備拡充が求められている。雄萠寮の蔵書、自治会資料の文書資料室への移動および整理も、その結果として実現することを願っている。

筆者は現時点では一営利企業にて就労しており、元々歴史専攻ではないながらも学生寮にて目録作成を独自におこなっていた時期と比べると、学寮史や大学史からは少し遠ざかってしまった。しかし、今後とも大学や学生寮の歴史、および大学アーカイブズの在り方について、考えていきたいと思っている。その原点には、学生寮在籍中に直接触れることができた、旧制高校以来の蔵書、大学闘争以来のビラそのものに、一次史料の魅力ともいうべき、何かただならぬ様相を感じた記憶がある。

表１ 静岡大学学生寮（～統合移転）

所在市	学部	寮名	開寮	閉寮
静岡	文理学部	仰秀寮	1924.5	1969.3
〃	教育学部	小鹿寮	1950.10	1969.3
〃	(女子)	安東寮	1951.4	1970.3
浜松	浜松分校	松涛寮	1952.4	1968.3
〃	(女子)	静灯寮	1957.8	1968.3
〃	工学部	自啓寮	1943.3	1968.3
〃	〃	曳馬野寮	1954.4	1966.3
磐田	農学部	遷喬寮	1949.6	1973.3

表２ 静岡大学学生寮（統合移転～）

所在市	対象	寮名	開寮
静岡	男子・女子	片山寮	1967.4
〃	男子	雄萠寮	1969.4
浜松	男子	あかつき寮	1966.4
〃	留学生・女子	あけぼの寮	2010.4

（出典） 静岡大学 50 周年記念誌編集委員会・通史小委員会 編(1999)『静岡大学の五十年 通史』表 6-11、6-12 などをもとに筆者作成

《URL》

・静岡大学大学文書資料室 HP

https://wwp.shizuoka.ac.jp/archives/

※「刊行物」に 70 周年誌、「所蔵資料」に雄萠寮蔵書目録を掲載。
その他多数の刊行物、資料目録等を随時公開中。

・静岡大学人文社会科学部　大学アーカイヴズプロジェクト HP

（2017 年アーカイヴズ委員会に改組、現在の代表は貴田潔先生）

http://www.hss.shizuoka.ac.jp/oshs/project/

※旧制静高および後身の静大文理学部・人文学部に関係する資料の整理・公開。

注

1　菅真城(2013)『大学アーカイブズの世界』大阪大学出版会　14 頁より引用

＊このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史（69）

女子文芸学舎から千代田高等女学校へ

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

明治43年、東京市麹町区に真宗本願寺派直営の千代田高等女学校ができるが、その前身は本願寺裏方（ほんがんじうらかた）・大谷籌子校長の女子文芸学校であり、さらにその前身は本願寺勧学・島地黙雷がはじめた女子文芸学舎である。よって明治21年創立の女子文芸学舎から話を起そう。

島地　黙雷

島地黙雷は前に書いた明治5年、真宗本願寺派が秀才僧侶5人を派遣して宗教事情を調べさせたうちの一人である。彼はヨーロッパ各地の宗教をしらべ、明治6年帰国するや神仏分離を政府中枢に策して実現するとともに西洋諸国への仏教布教の道を開いた。また白蓮社を興して仏教講話を行い、僧侶養成にも尽くして明治9年には本願寺派の本山西本願寺の執行長になった。

女子文芸学舎ができた明治21年頃の東京の学校設置状況をみると本郷加賀屋敷跡に帝国大学が第一高等中学校とともにあり、聖橋近くの昌平黌跡には官立高等師範学校が、また駿河台周辺には明治法律学校（後の明治大学）、東京法学校（後の法政大学）、英吉利（いぎりす）法律学校（後の中央大学）、などがあり、東京府尋常中学校も有楽町にできていた。女学校では四谷に華族女学校が、一ツ橋に共立女子職業学

校が神田に三輪田マサの翠松学舎（後の三輪田女学校）があり、明治21年には高級官吏の子女のため東京女学館が虎の門に、東京府高等女学校が築地南小田原町に開かれようとしていた。そして築地居留地にはプロテスタントミッション系の海岸女学校（後の青山女学院）、立教女学校があり、麻布には東洋英和女学校があった。（『東京都教育史通史編1』）。そうした学校叢の中に新顔の真宗本願寺派が女子文芸学者の苗を植えたのである。

東京府知事宛の開学願書は明治21年8月25日付、黙雷の妻・島地八千世名義で提出されている。校地は麹町区中六番町の本願寺派の白蓮教会がある所、敷地六百五十餘坪の中の建物30坪を教場にした。年間経費1,000円のうち800円は生徒授業料、200円は有志の寄付金によるという大ざっぱなものである。支出も同様で900円を教員給料にあて100円を雑費に使うという。カリキュラムは甲乙丙の3種があり、いずれも2年修業であるが、甲は英語・算術・和服裁縫・洋服裁縫・編物・挿花・点茶・和歌、乙は英語、算術、和服裁縫・洋服裁縫の4科、丙は一科選修である。実用主義のようにも見えるが、国語・漢文がなく、英語や洋服裁縫の重視にこの学校の主張がみえる。英語教科書にはバーンズニューナショナルリーダーの第1～第4やグードリッチ英国史・スイントン万国史やユニオンリーダー等が並んでおり、教具器械としてミシン3台、縫物台5台が置かれていた。教員は英学に東京専門学校英学卒業の林弁次郎、算術に岡山県温知学校出身の和田文次郎洋裁縫編物に宮内省御用沢田虎松修業の田中釜、和裁に木屋床七方修業の池田多嘉、挿花に池坊正風体蓮居法岸、点茶に千家茶道皆伝大須賀宗空、和歌に有賀長部らを揃えた。

開学願書に「本舎ハ専ラ良家ノ婦女ヲシテ家事ノ経理ニ必要ナル学科ヲ教授ス」と簡単に記されているが、この学舎の教育方針は同時に配られたと思われる「女子文芸学舎趣意書」の次の文に明らかである。

「（女子は）人の妻となり母となりて子女生育の大任を負ふ者たれば婉（しとやか）娩（出産）聴従、其徳性を養し貞淑慈愛其令行を発揚せしめ、出ては以て社会に周旋して社交を円滑ならしめ、入ては以て家政を整理し家風を優美ならしめ以て良人封助の任を尽し、以て子女教養の勉めを全うすべき者、是れ女子先天の職責にして其発達を誘導すべき者、是れ女子教育の方針なり」

社会、社交、家政など新しい時代を示す語もあるが、全体としてこれから形成される良妻賢母主義である。仏の教えとか宗祖親鸞の教えというようなことは微塵もない。翌22年1月、漢学と琴を学科に加え、京都本願寺大教校の教授・前田恵運と山田流箏曲の黒野花恵を教師に迎えた。そして修業年限を3年制に改めた。

こうして女子文芸学舎は私立女学校として動き出したが、その教育活動の実態は記録が乏しく掴み難い。約10年をへた明治36年6月なに故か設置者が島地八千世から実質設置者の島地黙雷に替り、38年には島地黙雷が本領寺派の東北開教総監になって盛岡の願教寺の住職になったので女子文芸学舎を白蓮社会堂ともども全部西本願寺に献堂するという大変動が起こった。

明治40年1月、西本願寺は大谷籌子裏方を学舎の設立者として校名を私立女子文芸学校と改称し籌子裏方をそのまま学校長にして旧校舎を取り壊すとともに新校舎をたてた。そして、41年1月には新しい学則をつくった。新学則は明治32年2月公布の「高等女学校令」（勅令31号）に準拠して、「本校ハ女子ニ須要ナル普通教育ヲ施スヲ以テ目的トス（第1条）」とし、4年制で必修科目を修身・国語・英語・地理・数学・理科、図画・家事・裁縫・音楽・体操の11科目、随意科目を和歌・編物・歴史・地理・理科・和歌・図画・音楽・体操・編物・点茶・挿花・割烹としている。随意科目は「高等女学校ノ学科及其程度」（文部省令7号）より多彩である。以上の本科のほかに選修科と研究科を設

けた。こうして設備、教則、教員が整えられたので、本山の本願寺住職・大谷光瑞名義で「私立高等女学校設置願」が明治43年2月21日付で東京府知事に提出され、直ちに認可、ここに千代田高等女学校が成立した。校長は大谷籌子であったが、44年7月には設置者大谷光瑞に替った。

「高等女学校設置願」をみて気づくことは学校経営に対する周到な準備である。前に述べた如く明治21年、女子文芸学舎の予算は年間1,000円で800円が授業料収入、200円が有志寄付という大雑把なものであった。

然るに43年の予算の収入支出をみると

収入		支出	
授業料	4,427円50銭	教職員俸給	6,600円
入学料	160円	校長書記俸給	1,440円
受験料	70円50銭	雑費	898円
本願寺より経常費下附	5,140円	臨時設備費	1,000円
同臨時費下附	2,000円	器械標本購入	1,000円
		予備金	800円
計	1万1,798円	計	1万1,798円

とくわしい。しかも授業料収入は本科生140名、専修科生70名の11ヶ月分、受験料は受験生160名を対象としている。経営陣も本願寺の

大谷家だけでなく、評議員会をつくり、毛利安子侯爵婦人を筆頭に貴族婦人16人、顧問会に清浦奎吾子爵をはじめ名士12名を並べている。明治44年の「私立学校令中改正」（勅令218号）で中学校や専門学校を営む私学は財団法人にしなければならなくなるが、千代田高等女学校の経営は恰も財団法人的な組織を持ったのである。こうした強力な経営組織によって生徒を集め寄宿舎をつくり、技芸専修科を加え、44年にはさらに2年制の実科高等女学校を併設して大正期の繁栄へと向かうのである。4年制の本科は現千代田女学園中学校高等学校へ続く。

参考文献『千代田女学園の歴史・史料編1』

1986（昭和61）年度の大東文化大生の就職状況
―「大学案内」（1988年）から―

谷本（たにもと） 宗生（むねお）（大東文化大学）

本稿は、NL64号（2020年4月）所収の「1989（平成元）年度の大東文化大生の就職状況 ―「大学案内」（1991年）から ―」に内容的に呼応するかたちで、「大学案内」（1988年）から、1986（昭和61）年度の大東文化大生の就職状況について紹介してみたいと思う。同上「大学案内」所収の「就職」欄では、冒頭の「概況」で、「昭和61年度は貿易摩擦、円高問題と就職市場に陰りをみせたが、積極的にチャレンジしてみるべきだろう。このところ企業サイドでは景気の好不調にかかわらず、恒常的に一定の数の人材を採用してゆく傾向にありしばらくは堅調がつづくと思われる。企業の求める人材は、一時の猪突猛進型は余り歓迎されず、むしろクールな状況判断力と柔軟な創造性・協調性に富む人材が求められる。学業成績よりは人物本位、つまりは人間的資質、潜在的能力などがより重視されよう。『寄らば大樹の陰』的な消極的姿勢でなく、規模は小さくとも将来性のあるベンチャー・ビジネスなどにも積極的にチャレンジしてみるべきだろう」（57頁）と記されている。

具体的な「昭和61年度の就職状況」については、「昭和61年度は就職希望者1895名に対し6658社から求人があった。伝統的に教員志望者の多い文学部は、昨今の全国的な教員採用枠の減少のあおりを受けてやや苦戦を強いられたが、依然教員決定者が約31％とトップを占めている[教員の他、公務員5.6％]。教員未決定者が安易に他の職種に鞍替えせず、あくまでも再受験を目指して努力しているのも本学文学部の特色といえる。61年度はいずれの学部においてもサービス業の伸びが止まり[文学部13.1％、経済学部15.3％、外国語学部

15.4%、法学部14.7%]、金融業の伸びが目立つ。文学部においても6.4%が金融業に採用決定しており、製造業[9.7%]、建設・不動産業[5.6%]、などの伸びとともに業種の多様化が目立つ。経済学部は例年卸売業の大手企業に採用決定する者が多く、61年度は43.9%を占めた。金融業の伸び[12.5%]も大きく地方金融に着実な地歩を築きつつある。公務員[4.8%]、教員[2.2%]の再受験組を除き100%の就職率であった。外国語学部は最近の企業の業種が国際分野への進出などからクロス・オーバーしており採用傾向の特長を捉えにくいが、語学力と国際性を買われての採用が多く堅調である。卸・小売業[38%]を中心としているが、金融・保険業[8.3%]、運輸・通信業[3%]、教員[12.4%]の伸びも目立つ。法学部は例年公務員採用者が多い[12.1%]が、61年度は公務員希望者が金融へ流れ15.8%採用決定している。サービス業[14.7%]、卸・小売業[36.8%]は減少し、製造業[13.2%]、建設・不動産業[3.2%]の伸びが目立っている。法曹界、公務員への専願者を除き就職率は100%に近い」(57頁)とし、全体的にみても就職状況は好調といえるだろう。さらにその内訳で、「地域別就職状況については、当然関東地域が多く就職者数は全体の67.9%を占めているが、最終的に勤務地が確定した段階ではさらにこのパーセンテージは上るものと予想される。ここのところ地域活性化の動きが強まってきており、各地域とも人材獲得に腐心している状況にあり、改めてUターンの是非について考えてみる必要もある。しかし、いずれにしろ安易なふるさと志向は、企業の国際化、情報化、労働力流動化の進む現在、あまり勧められる姿勢ではない」(58頁)と、就職を想定して学生らに対する助言などがなされている。

そして「就職部の指導体制」については、「1年から卒業年次までの全学生を対象に学生の希望業種、職種に就職させるための指導、助言、紹介をしている。1・2年次生対象では、学年はじめのガイダンスは

もとより、教育職員講座、公務員講座、模擬試験を実施し、卒業時に対処できるよう配慮しており、3・4年次生対象では、1・2年次生対象の延長線上で教育職員講座、模擬試験を実施するほか、3年次から就職のための英語・中国語講座も語学教育研究所の協力を得て開講している。また4年次の民間企業指向者には3年次生の11月より、ガイダンス、2・3月に業界展望説明会、4年次生の体験談などをはじめ多くの行事を催している。特に個人面談では本人の適性にあった業種、職種を話し合い、適職を求め、上場企業および優良企業へ紹介している」（58頁）とあり、学生に応じた細かな就職指導を大学としてできるだけの範囲で保障している。

また就活を終えた「OBメッセージ」として、外国語学部の小竹真弓さん（ニチレイ株式会社）は、就職活動ではまずもって「勇気が大切」として、「面接は人とあらそうものではないので、自分らしさを少しでも出せるよう、明るく対応し」たという。「それから一番大切なことは、その会社に関することに興味をもって接することです」と訴え、具体的な実例として、「そこの従業員と話をしたり、買物をしたりしました。なにげない会話から、おもわぬ情報が入手できたりして、とても楽しいものです。就職活動というと、リクルート雑誌等で紹介しているような、おきまりの型をそれと考えがちですが、日頃から何かに興味をもって生活することから、就職活動が始まっているのではないでしょうか」（60頁）と、実体験に基づく「就職活動で大切なこと」を、裏表なく後輩諸氏に向けて挙げている。このような就活の先輩としてのOBOGらの体験談（成功・失敗を含む）などは、就職部の就活指導の一環としても、まさに就活の本番を迎える学生らにとって、とても心強い「就職ガイダンス」の役割を果たしたものであったといえるだろう。

学校資料の教材化を模索して⑬
―「校門」を題材とした小論文指導を事例に―

八田（はった） 友和（ともかず）（クラーク記念国際高等学校）

1．はじめに

本稿は、筆者の勤務校で実践した、学校資料を題材とした小論文指導について、その概要を整理・提示するものである。筆者が担当する小論文の授業では、小論文を執筆するだけでなく、ディスカッションや新聞の読解などを組み込むことで、小論文を執筆する際の知識の教授や、学習者同士の学び合いの活動を促している。多くの場合は、「ワークシートを用いた個人ワーク」→「ディスカッション」→「小論文の執筆」→「添削・返却」のような流れをとり、小論文執筆の前に入念な個人ワークや学び合い等の活動を設定するように留意している。

以上を踏まえ本稿では、「校門」を事例に行った小論文指導について整理・提示を行う。

2．教材としての校門

校門は、「学校へ出入りするための門」であり、規模や大きさの大小はあるものの、比較的多くの学校に設置されている。校門は、そこを境界に学校の外と中を区別する重要な役割を果たしており、大阪教育大学附属池田小学校での事件後、その重要性や役割・機能などが見直されている。日本では、東京大学本郷キャンパスにある赤門[1)]や、閑谷学校の公門[2)]が著名な校門として知られている。

一方で、校門を設置していない学校も一定数存在する。設置しない理由としては、「開かれた学校を地域の人に視覚的にアピールするため」など様々ある。例えば、茨城県にある国立大学法人筑波大学では、校門が設置されていない。また、生徒たちが通う、クラーク高校も、校舎

自体が国道2号線に面しており、校門という校門は存在しない。

以上のような校門がもつ多様性を踏まえた授業実践を、筆者が担当する授業（科目名：小論文）で行ったため、その概要を整理・提示する。

3．授業の概要

本実践の概要は次の通りである。

（1）科目名：小論文（学校設定科目）
（2）期　間：2020 年 7 月 16 日（木）
（3）場　所：クラーク記念国際高等学校 芦屋キャンパス
（4）担　当：筆者、石川眞椰
（5）課題内容：「学校に校門は必要ですか？不必要ですか？」
（6）回収人数：12 人
（7）授業の流れ・方法

まず、小論文の課題として「学校に校門は必要だと考えるか、不必要だと考えるか」を提示した。筆者の授業を受講している生徒全員が、校門を備えた小学校や中学校に登校していたため、「学校＝校門が設置されている」という既有知識に揺さぶりをかけることを意図して設定した。

次に、東京大学や筑波大学の事例を紹介しながら、校門がある学校とない学校について紹介を行った。その際、生徒たちが通った中学校とクラーク高校を比較させることで、校門について身近に感じさせるきっかけをつくった。その後、小論文を書く際の基本的なルールや課題の提出方法等について説明を行い、授業を終えた。

生徒たちは、インターネットや図書を活用して調べ学習や素材探しを行い、小論文を書き上げた生徒から筆者に提出した。

4. 生徒が執筆した小論文

ここでは、生徒が執筆した小論文の中から、二つを取り上げ、一部を抜粋して原文のまま紹介する。

①	二〇〇一年に大阪教育大学附属池田小学校で発生した無差別殺傷事件では、正門が閉じられていたため、横にある、開いていた自動車通用門から侵入があった。その点から、校門を閉じておくことで部外者の侵入の抑止になるといえる。
②	一つ目は、入り口がわかりやすいからだ。校門がなければ、どこからが学校なのかハッキリしない。そうなると、学校の中にいるという実感が湧かず、学習意欲もわいて来ない。校則があっても、門を通らないことで、守ろうという気持ちが薄れてしまう可能性が出てくると思う。

まず、①の小論文は、調べ学習で大阪教育大学附属池田小学校の事件を調べ、それを踏まえて執筆したことが伺える。学校安全の視点から校門をとらえて、執筆している。次に、②の小論文は、普段登下校して、感じていることを文章にまとめている。自身の体験を具体的に描写することで、より説得性の増した文章になっている。どちらの文章も拙い表現等が見受けられるが、調べた結果や普段感じていることをまとめてくれている。紙面の関係で、全ての小論文を紹介できないが、学校安全・体験談・雰囲気・気持ちの切り替え・伝統など、多くの視点から小論文の執筆がなされていた。調べ学習をした結果、学習者が校門に関する多くの視点を得て、小論文執筆を行ったことが伺える。

5. おわりに

本稿では、校門を事例とした小論文指導について、その概要を整理・提示してきた。

生徒が身近に感じる話題は、既有知識の多寡に関わらず取り組めるという利点がある一方で、ともすれば、既有知識の域をでない文章になってしまうという問題点を内在させている。よって、身近な話題をテーマにただ小論文を書かせるのではなく、テーマに対する興味・関心を高めたうえで、調べ学習の後、小論文を執筆させることで、より内容を深化させることができると考えられる。

今後も学校資料をはじめとした、生徒が身近に感じるような題材を取り上げた小論文指導を心がけたい。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、クラーク記念国際高等学校の石川眞椰氏にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

【註】

1）文京区サイト「東京大学赤門」（最終確認 2020 年 9 月 9 日）
https://www.city.bunkyo.lg.jp/bunka/kanko/spot/shiseki/akamon.html

2）特別史跡旧閑谷学校サイト（最終確認 2020 年 9 月 9 日）
http://shizutani.jp/

【参考文献】

・苅谷剛彦 2002『知的複眼思考法－誰でも持っている創造力のスイッチ』講談社
・澤田昭夫 1983『論文のレトリック』講談社
・村野正景・和崎光太郎（編）2019『みんなで活かせる！学校資料－学校資料活用ハンドブック－』学校資料研究会
・島田雄介・神野晋作・八田友和 2018「学校所在資料の活用～学校現場に聴く～」『考古学研究』第 64 巻 3 号，pp.10-19
・文部科学省 2019『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説－地理歴史編－』東洋館出版社

明治後期に興った女子の専門学校（24）
東京女子医学専門学校認可への苦しい道のり

長本（ながもと） 裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

東京女医学校は、創立から10年、ようやく世間から認められるようになった。残るは専門学校への道である。学生や保護者からも早く専門学校にしてくれるよう、文部大臣の指定学校にしてくれるようにと催促された。しかし、専門学校に昇格させるには、「専門学校令」及び「公私立専門学校規程」により、文部大臣の認可を経なければならなかった。吉岡弥生には、大学教授などの肩書も後ろ盾も資産もない。至難の業であった。だが、この専門学校への昇格には、女医の将来と300人の在学生に対する責任がかかっていた。

42年6月、東京女子医学専門学校設立の申請書を、東京府を経て文部省に提出した。しかし、半年経っても何の音沙汰もなかった。文部省は女医の必要を認めず、女子高等教育機関を不必要なものとして申請を黙殺した。弥生は、再度書類を作成し、文部省との交渉に何度も足を運んだ。さらに半年経ってようやく文部省から大沢視学官が視察に来校した。しばらく経って栗本技師、瀬戸視学官の視察が行われたが、何の指示も与えられなかった。

43年8月、最初の申請書を提出してから1年2ケ月、ようやく文部省から必要な条件が指示された。

> 付属病院に内科、外科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、小児科の諸科を置き、各科別々の診察所を設けること。施療患者の病室を25室設けること。1年間に少なくとも実習用に屍体を25体解剖すること。

このうちどれかが欠けても許可しないというものであった。

すぐに学校と病院の増築に着工し、44年7月には各科の診察所、解剖実習室が落成した。弥生は同月7日、文部大臣宛に再申請を行った。しかし、文部省は却下。専門学務局長福原鐐二郎は東京府知事阿部浩に対して文書を発した。

「…同校の規模並設備等尚十分ナラサル点有之候ニ付少クトモ左記各条件ヲ充実セシメラレ候上再申請スル様…」

学校の規模や設備が不十分で、さらに「左記の各条件」を充実せよというのである。「左記の各条件」とは、以下の7項目である。〔（　）内は筆者注〕

一、系統解剖学及病理解剖学ノ実習ニ必要ナル解剖体数ヲ増加シ且之カ授業ニ供スヘキ標本ヲ充実セシムルコト（解剖体数と標本を増加せよ）

一、衛生学及細菌学生理学及組織学ノ教授及実習に要スル器械及其ノ他ノ設置ヲ整フルコト（各科の教授、実習用器械、その他の設置を整えよ）

一、外来及入院患者ノ治療ニ要スル医療器械ヲ充実スルコト（医療器械を充実せよ）

一、現時附属病院ニ於ケル外来患者員数ノ増加ヲ図リ学生ノ臨床実験ニ便ナラシムルコト（学生の臨床実験のために外来患者を増やせ）

一、入院学用患者モ亦其増加ヲ図リ少クモ平均一日五拾名以上ノ一般入院患者ニ対スル病床ヲ具フルコト（少なくとも1日平均50名以上の入院患者の病床を具えよ）

一、外来患者診察所ヲ分科的ニ設備スルコト（外来診察所を各科ごとに設置せよ）

一、模範的外科手術室ヲ建設シ猶之ヲ外科臨床講義室ニ充ツルコト（外科手術室を建設し臨床講義に充てよ）

この文書は、東京府内務部長依田銓次郎より牛込区長古本崇に下達された。

前回の43年8月に指示された条件をやっとの思いでクリヤーしたと思ったら、さらに難題が出された。まるで東京女医学校を専門学校に昇格させないためのような仕打ちである。医学専門学校の条件としては当然のことかもしれないが、それならば、前回43年8月の指示の時に伝えるべきである。無理難題を押し付けて、期限切れとなることを待っているかのように思える。

さらに、追い撃ちをかけるように、申請書提出中の44年7月31日に、「私立学校令」に改正が行われた。第二条ノニとして、

> 私人ニシテ中学校又ハ専門学校ヲ設立セムトスルトキハ其ノ学校ヲ維持スルニ足ルヘキ収入ヲ生スル資産及設備又ハ之ニ要スル資金ヲ具ヘ民法ニ依リ財団法人ヲ設置スヘシ

という一文が加えられた。私立の専門学校を設立する場合には、その学校を維持するために十分な資産および設備を備え、民法により財団法人を設立することを義務づけた。授業料以外の収入、設備、資金を準備することを要件とし、設立者個人の収入と学校の収入を明確に区別し、財団法人を設立すべきとした。これによって、7月7日に再申請した設立願書は、9月27日、牛込区長より吉岡弥生校長に返送され、同日、文部省号外として一般に告示された。

東京女医学校として存続か廃止かの決意を迫られた。弥生は必死だった。11月30日、すでに改善したものを列挙し、未了のものは将来必ず改善するので、どうか昇格をお願いするという切実な思いを述べた陳情書と、財団法人設置許可書などを添付した認可申請書を文部大臣宛に提出した。牛込区役所は、12月1日、東京府に進達し、翌2日、文部省に届けられた。東京府は同月4日、牛込区長に対し、調査を命じた。

「…負債若クハ負担ノ有無及資産ニ関スル権利ヲ証スベキ書類必要…」

負債がないか、資産に関する権利証などの書類が必要というのである。同年の暮れ近くになって、文部省より弥生は出頭を命じられた。参事官、中央衛生会委員らの立ち合いの上、学校の内容に関する質問を受けた。そして、設備改善の方法について示唆を与えられた。

吉岡夫妻は、私有財産であった学校及び病院の建物５万4,600円、器械器具３万円、現金６万200円を寄付し、合計14万4,800円の資産を登記して財団法人を設立した。そして、翌45年３月13日、文部省から財団法人の設立が認可され、翌14日、東京女子医学専門学校の設置が認可された。３年かかった。初代校長及び付属病院長に吉岡弥生が就任した。１台の顕微鏡を購入するのでさえ容易ではない経済事情の中で、認可を得るまでに何と19棟を増築した。「この時の喜びは真にたとえようもなくして…」と弥生は述懐している。世間では女子の専門教育を呪い、女医の技量を疑い、無能不用を叫ぶ声があったという。

東京女子医学専門学校
(『吉岡弥生伝』より)

さらに、残された問題は文部大臣の指定学校になることであった。しかし、実力さえあれば医師試験に合格できる。弥生は、指定学校になるとかえって生徒が勉強を怠けるといけないと思い、あまり急がなかった。第４学年の課程を修了後、４年間の全課目をもう一度復習させるために試験を行い、実力をつけさせた。そして時機の熟するのを待った。大正６年２月、専門学校になって初めての卒業生46名のうち27名が新

制度の医師試験に合格した。合格率58.7％の好成績であった。この時、男子受験者の合格率は22％にすぎなかった。8年になると文部省の方から、希望なら指定学校の申請をするようにと勧告があった。そこで、吉岡夫妻の私有財産であった建物、現金を追加寄付して、法人財産を合計32万,500円に増額し指定学校の申請をした。9年3月、念願の文部大臣の指定を受け、同年以降の卒業生は、卒業と同時に医師の資格が得られることになった。開校から20年、我が国唯一の女子高等医育機関であった。

荻野吟子や高橋瑞子が拓いてくれた女医への道を絶やすわけにはいかないという一念が、再三押し寄せる困難に弥生を立ち向かわせた。そして、吉岡弥生もまた女医界の礎となったのである。

参考文献

『東京女子医科大学小史』―六十五年の歩み　三上昭美著

『吉岡弥生伝』吉岡弥生女史伝記編纂委員会編集

『学制百年史』文部省

『医制百年史』厚生省

カレッジノベルの研究への道（15）
：久米正雄「受験生の手記」（6）

吉野（よしの） 剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

今号では、久米正雄が書いた別の作品である「受験生の手記」について検討する。これまでは受験の描写を検討してきたが、今号からは別の観点からこの小説を検討する。

第 61 号において、この小説は、高等学校受験生というエリート層の「うぶ」な青年が女性に翻弄されつつ、「大人の階段」を上ろうとするも挫折して自死するという悲劇でもあることを指摘した。小説は「売り物」であることを考えれば、受験生の姿が垣間見えるという点よりこの点の方が、作品の評判を左右しそうである。この作品が公表された時代に、高等学校入試のことを正確に理解しうる人は決して多くない。この国に存在することは知っていても実態は謎のエリートなる人種が、お勉強をしている中で色恋に翻弄され、最後は自死するという悲劇として、この作品は人々に受け止められたものと思われるからである。本号からは、この点について考えていくことにしたい。

自死までの流れをもう少し詳細に触れると、主人公健吉は澄子に恋をするも、弟の健次に彼女を取られることで失恋し、その後自棄を起こして、最後は自死する。試験にも恋にも負ける悲劇というわけだが、この小説の最後には、作者附記として「手記」の入手の経緯（第 61 号で触れたように実話ではない）とともに、余計ともいうべきことが書かれている。

それからも一つ読者の参考までに、少しく後日譚をしようならば、澄子と弟との恋愛も、その中に破れて了つた事である。どうせ澄子のやうなコケティッシュな女だから、さうあるべきとは想像がつくだらうが、念のため付け加へて置く。

作者附記自体が創作であるから、作者である久米は、澄子はコケティッシュな存在として読者の目に映ると見ていたことが示唆される。そんなコケティッシュな女と弟も結局うまくいかないというオチを付けることで、読者の溜飲を下げさせるという論法である。

あるいは、当の久米が澄子のような女性をコケティッシュと見なしていたという理解も可能である。もしそうだとすれば、それは非常に興味深い。久米は一高に無試験検定で入学し、東京帝大に入学したという履歴を持つ、まさしくエリート街道を歩んだ人間であり、健吉や健次に限りなく近い人間だからである。つまり、久米の恋愛観が色濃く反映されているとすれば、それは同時代のエリートの恋愛観の一端を垣間見ることができる素材ということにもなる。

そこで、健吉と澄子に関するエピソードを両義的に考えてみることにしたい。澄子をひたすらコケティッシュな女性としてとらえる見方が一つであり、澄子はあくまで普通であって健吉が舞い上がっているだけという見方がもう一つである。

この小説は、健吉の二度目の上京生活を主たる舞台としている。澄子とのあれこれもその中で起こっていくのだが、今号はそのようなあれこれの手前の部分を検証することにする。

健吉は、一度目の上京のときも、二度目の上京のときも、義兄と姉の

住む家に下宿している（後の号で触れるが、二度目の上京では途中で一人暮らしを始める）。澄子との出会いは一度目の上京のときで、上京して３日くらい経った６月のある日曜日に義兄の家に遊びに来たときに出会い、その後遊びに来るたびに話をする仲になったと書かれている。しかし、同時にその会話の時間は長くもなかったとも書かれている。

義兄の姪で、白金に住む澄子は、ほぼ毎週日曜日に千駄木の義兄の家に遊びに来るという設定になっている。健吉にいくばくかの好意があってこそ、毎週のように遊びに来るのだと思いたいところだが、千駄木の家に来るということは、健吉の存在とはおそらく無関係である。

健吉の二度目の上京は１月のことである。まずは以下の叙述を見てみよう。

> 今度の早い上京だつて、父はなかなか許しさうにもなかつた。が自分は今年入らなければ廃(よ)すと迄誓つたため、やつと許して呉れたのだ。だからいづれにもせよ、今年入らなければ生きては帰れないのだ。それに弟だ。彼奴ともとうとう受験期が同じくなつて了つた。それを考へると私は、何となく恥づかしくてたまらない。
>
> 何しろ、上京したらしつかり勉強しなければならない。さう思ふと胸が躍るやうだ。そしてもう今日の中には上京してゐるのだ。今迄の陰惨な、屈辱な家での蟄居から、あの光りかゞやく都会に出て、自由に勉強することが出来るのだ。それに東京には、去年の八月来半年会はない、慕はしい澄子さんが待つてゐる。私が上京したら、いつもの通り晴々しい笑顔を持つて、義兄の家へ訪ねて来るに相違ない。それがどんなに自分の励みになるだらう、それにし

ても何故去年、あの人の前で自分は一高へ入らなかつたらう。入つてゐたら白線入しろすぢいりの帽子を被つて、今時分は大手を振つて会へたのだ。それを考へると私は口惜しくなる。

二度目の上京が早いのは、早く澄子に会いたいからである。これまでに検討したように、健吉はお世辞にも真面目な受験生とは言い難い。殊勝な志をもって東京に向かう電車に乗っているようだが、結果的に真面目な受験生活を送らない。東京でなければできなかったことは、参考書を買い集めることと、予備校に通うことくらいだが、参考書を真面目に読んだ形跡もなければ、予備校は生活のリズムを整えるための道具くらいにしか考えていない。率直に言って、東京に来る必然性はほとんどない。浪人生として年子の弟と同居しているのは気分のよいものではないだろうが、自分への言い訳と評すべきものである。刻苦勉励しているならば、そんなことを気にしている暇はない。

澄子との馴れ初めの話は、上述の引用箇所より後ろの部分にあるのだが、その馴れ初めの経緯に触れた後には、以下のような叙述がある。

去年の受験期は短かつた。そしてそれにすぐ不面目な失敗が結果された。あゝ、それに就ては、もう何も云ふ必要が無い。私はあの時、恥かしくて澄子さんにも会はず、急いで故郷へ逃げ帰つたのだつた。あとから澄子さんの手紙が来た。黙つて帰つた恨みや、決して一度許りの失敗に落胆するなと云ふやうな事が、妙に大人びた文章で書いてあつた。私はそれに幾度接吻したことか！どんなに感謝したことか！ そして長い屈辱な家での蟄居の間、幾

度それによつて慰められたことか！

何は兎もあれこの頃は、日曜毎には彼女に会へるのだ。

試験に落ちて故郷に戻った健吉に手紙を出すあたりは、当時の感覚からすれば澄子は健吉に気があると思われてもよいのかもしれない。それほど気もないのに手紙なんぞを送っているのだとしたら、まさしくコケティッシュと評されても仕方がない。

しかし、それ以上に健吉がその手紙に舞い上がっている。澄子の手紙にキスをすることで「陰惨な、屈辱な家での蟄居」が慰められるというのである。そもそも手紙にキスをすること自体、尋常な事態ではない。

手紙の内容に慰められるところがあったのだろうが、黙って帰ったことを澄子が心底恨んでいるのなら手紙など出さないのであって、一度の失敗に落胆するなという文言は、限りなく社交辞令に近いと考えるべきであろう。むしろ、黙って帰ったことの恨み言は、社交辞令のための枕詞のようにすら思える。

つまるところ、健吉の二度目の上京は、澄子へのほとばしる思いがそうさせたということである。上京後にさまざまなことが起こっていくが、その点は次号以降に検討していくことにする。

教育史研究のための大学アーカイブズガイド（24）
―コロナ禍における大学アーカイブズの現状①―

田中（たなか） 智子（さとこ）（早稲田大学大学史資料センター）

本年 4 月の緊急事態宣言発令によって大学のキャンパスが閉鎖されたことにより、大学アーカイブズの多くは業務の休止・停止を余儀なくされた。宣言が明けて久しい今日でもなおその影響は続いている。今号からはコロナ禍における大学アーカイブズの現状と題して、現在の各大学アーカイブズの業務の状況について、記録の意味も込めて述べていく。1 回目の今回は、国立大学アーカイブズのうち、（1）北海道大学大学文書館、（2）東北大学学術資源研究公開センター史料館（以下、東北大学史料館）、（3）筑波大学アーカイブズ、（4）東京大学文書館の状況について紹介していく。

（1）北海道大学大学文書館

本ニューズレター第 42 号で紹介した通り、北海道大学大学文書館は北海道大学に関する公文書・歴史資料を保存・管理する公文書館であり、同大学の歴史に関する展示も行っている機関である。同館は本年 4 月 17 日、緊急事態宣言を受け、館内の展示を同日より休止すること、および 4 月 20 日より臨時休館期間に入ることを発表した。当初は 5 月 1 日までの予定であったが、度重なる延長を経て 6 月 24 日に開館した。しかし、来館利用への対応としては「事前予約制による閲覧利用」のみとなり、展示についても文書館内の展示は 10 月 1 日現在も休止したままである。詳細については、下記ホームページを参照のこと。

https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/

（2）東北大学史料館

本ニューズレター第 48 号で紹介した通り、東北大学史料館の基本業務は、①公文書室に移管・寄贈された特定歴史公文書等の保存・公開等、②大学関係の歴史資料の収集・公開等、および③展示業務である。本年 2 月 28 日、新型コロナウィルスの感染拡大をふまえ、耐震改修工事中であった展示室に加え、本館 1 階の閲覧室、本部棟の魯迅記念展示室出張展示（魯迅の階段教室含）についても 3 月 2 日から 13 日まで閉室とすることを発表した。その後、この閉室期間は「当面の間継続」となり、10 月 1 日にようやく閲覧室の利用が再開された。ただし事前予約等が必要となるため、利用の際には下記ページを参照されたい。

http://www2.archives.tohoku.ac.jp/news/reopened2020100 1.pdf

（3）筑波大学アーカイブズ

筑波大学アーカイブズは、公文書等の管理に関する法律に基づき、①歴史公文書等の移管の受入れ・整理・保存、②筑波大学に関する資料の収集・整理・保存、③学生、職員その他広く一般の利用に供することを業務としている[1]。本年4月13日、新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から、「4月15日（水）から当分の間、閲覧室を臨時閉鎖」することが発表された。この措置は6月19日に一部解除されたものの、利用者を学内教職員・学生に限るなどの制限が続いている。

https://archives.tsukuba.ac.jp/category/news/

（4）東京大学文書館

東京大学文書館は、「公文書等の管理に関する法律に定める特定歴

史公文書等及び本学にかかる歴史的な資料の適切な管理、保存及び利用等を図るとともに、資料の保存・利活用のための調査研究を行うことを目的と」[2]して2014年に設置された。本年3月27日、「3月30日（月）より新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、当面の間閉館」することが発表された。現在も閉館は継続中であるようだが、7月より「写しの交付」の申請には対応しているようである。
https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/06_j.html

以上、4つの国立大学アーカイブズの現状について見てきた。いずれも国立公文書館等に指定されている機関であるが、それぞれ休館期間や対応が異なることがわかる[3]。ただ、いずれも来館利用についてはかなり慎重な対応をとっており、現在も制限は続いている状態である。

1 筑波大学アーカイブズリーフレット（https://archives.tsukuba.ac.jp/wp-content/uploads/sites/16/2017/04/20170403122417.pdf）
2 「東京大学文書館規則」（https://www.u-tokyo.ac.jp/gen01/reiki_int/reiki_honbun/au07411041.html）
3 なお、国立公文書館は、4月1日から6月1日まで臨時閉館し、6月2日より閲覧室・展示室ともに利用再開している。

（つづく）

「遠隔授業」準備メモ（6）

冨岡（とみおか） 勝（まさる）（近畿大学）

はじめに

勤務校で新型コロナウィルスへの対応に追われる中で書き始めたこのメモを、第63号の（1）、第64号の（2）、第66号の（3）、第67号の（4）、第68号の（5）と書き続けてきた。

第68号の「『遠隔授業』準備メモ（5）」では、従来の教室のスクリーンでの録画ビデオ使用の代わりに、NHKなどから公開されている動画のURLをオンライン受講の学生に伝えて視聴させるという試みについて報告した。

本号では、次号では、映画の代わりに原作の小説を事前に読ませ、授業中にその小説に関するクイズとその解説を通して教材理解を促すという方法について紹介したい。

映画『二十四の瞳』を使って従来実施していた授業

従来は、「教育の思想と歴史B」の第6回・第7回・第8回授業で、映画『二十四の瞳』を教室のスクリーンを使って学生に視聴させていた。

第6回授業（授業タイトル：「二十四の瞳」にみる教師と子ども1）では、主人公の大石先生が1928年に小豆島の岬の村の分教場に赴任した年を描いた物語の冒頭から三分の一ほどを視聴し、「大正期の主な教育家・教育思想」について紹介した上で、「大石先生は、どのような点で新しい教師だったのか？」というテーマについて学生に考察させた。

第7回授業（「二十四の瞳」にみる教師と子ども2）では、本村の小学校で高学年になった岬の子どもたちを担任した大石先生が、1不景

気で経済的に困窮する子どもたちの姿や、満州事変後の学校で次第に軍国主義の影響が高まっていった様子に心を痛めていた様子を描いた、物語の真ん中約三分の一を視聴した。そして視聴後に、大正期から昭和10年代までの日本の教育の流れを解説し、「大石先生は退職するべきだったのか？」というテーマで考察させた。

第8回授業（「二十四の瞳」にみる教師と子ども3）では、太平洋戦争から戦後にかけての元教え子の様子を描いた物語の終りから三分の一を視聴し、「戦中・戦後を生きた大石先生の教え子たちにとって、学校とは何だったか？」について話し合いを行った。

このように、教室で同じ映画を一緒に視聴して、イメージを共有しながら授業テーマを考察するというスタイルで授業をしてきた。

原作『二十四の瞳』を読んでクイズに挑戦するスタイル

しかし、新型コロナウィルスの影響により、教室での対面授業ができなくなり、映画をインターネット上で配信することも著作権上不可能となった。そこで、壺井栄原作の小説『二十四の瞳』を宿題としてあらかじめ読んできた学生たちに「二十四のクイズ」に挑戦させることで、物語の内容理解を進めながら、考察してほしいテーマにつなげていくという方法を試みた。

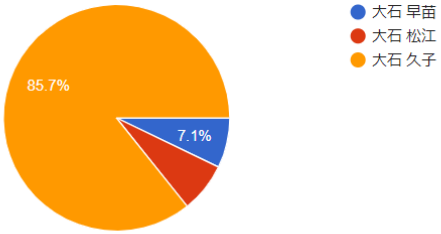
作成したクイズにはまず、GoogleFormsで作成したクイズに一通り回答した上で、解説のスライドに音声を吹き込んだ動画を視聴させた。

第6回授業（「二十四の瞳」にみる教師と子ども1）向けに作成した「二十四の瞳クイズ1」（全7問。集計結果つき）と解説スライド（第5問と第6問）を次のように紹介したい。

「二十四の瞳クイズⅠ」（全７問。集計結果つき）

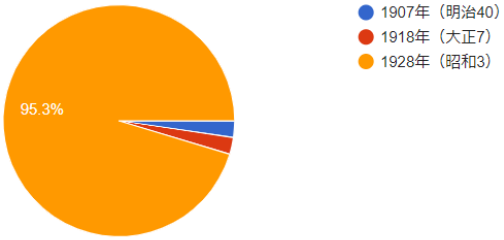
第1問　大石先生のフルネームは？

42 件の回答



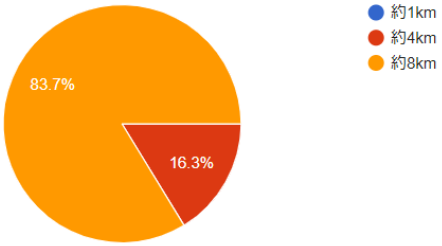
第2問　大石先生が岬の分教場へ新任教師として赴任した年は？

43 件の回答



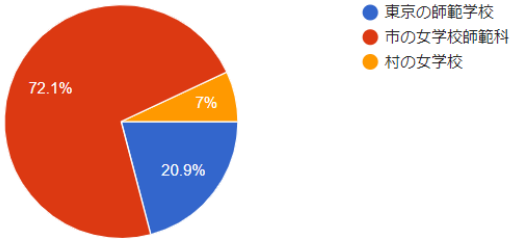
第3問　大石先生の自宅から岬の分教場までの距離は？

43 件の回答



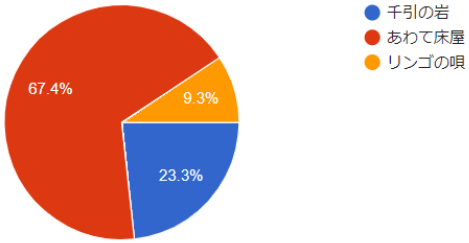
第4問　大石先生の最終学歴は？

43 件の回答



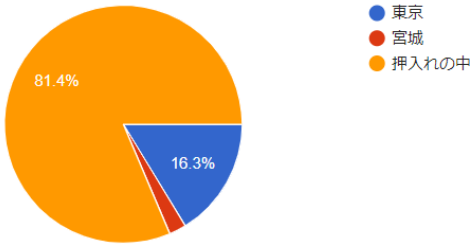
第5問　大石先生が唱歌の時間に子どもたちと歌った曲は？

43 件の回答



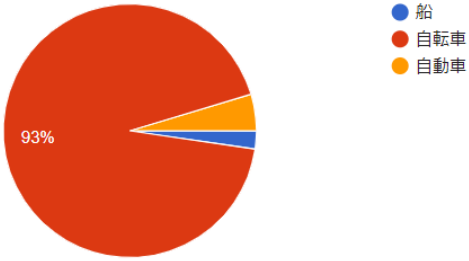
第6問　「天皇陛下はどこにいらっしゃいますか？」への答えとして仁太はどう答えたか。

43 件の回答



第7問　村の人が大石先生に気を許さない原因として男先生が洋服とともに挙げたのは何か？

43 件の回答



「二十四の瞳クイズⅠ」解説スライド（第５問と第６問）

第5問　大石先生が唱歌の時間に子どもたちと歌った曲は？

①　千引の岩
②　あわて床屋
③　リンゴの唄

正解は②、角川文庫版なら242頁中の44頁

①は唱歌の一つ。唱歌は明治時代から、主に文部省で作られた。教訓的内容・国家主義的内容が多い。

②は童謡。童謡は、子どもの心に寄り添う、鈴木三重吉の『赤い鳥』が提唱した。童謡は、唱歌教科書には掲載されなかった。

③は敗戦直後に流行した曲。

12

第6問　「天皇陛下はどこにいらっしゃいますか？」への答えとして仁太はどう答えたか。

①　東京
②　宮城
③　押入れの中

正解は③　角川文庫版なら242頁中の42頁

仁太が奇抜な答えを大声で言ったので、大石先生は涙を出して笑った。大石先生と生徒の笑いは教室を揺るがして校外まで響いたほど。

14

クイズでは原作のやや細かい部分も問うたので難しく感じた受講生もあったが、クイズから授業テーマへのつながりは良好で、授業中に学生が作成したミニッツペーパーでは、大正デモクラシーの児童中心主義や、大正期の童謡運動などとつなげながら「大石先生は、どのような点で新しい教師だったのか？」のテーマについて詳しく考察した答案が、数多く見られた。

また、第７回・第８回授業では、クイズ全問正解は若干の加点をすると告げたこともあり、かなり細かい部分まで読み込んできた学生がクラスの三分の一ほどあった。

資料を読ませてクイズをおこなう、という方法は決して目新しいものではないが、原作についての学生のモチベーションを高め、授業テーマへ導入するという点では、少し手応えを感じた。

遠隔授業の試行錯誤はまだまだ続いているが、以上でこの「遠隔授業」準備メモをひとまず終え、次号は、本来の研究テーマに復帰したいと考えている。

『久徴館』のめざすもの（6）

北条時敬の演説「慎独ノ学問」(上)

小宮山（こみやま） 道夫（みちお）（広島大学）

久徴館の重要な行事の一つに「一致会」と称する会合がある。一致会は『久徴館同窓会雑誌』第7号の「記事」欄の記述によれば、「毎月一回久徴館に於て館生及旧館生は一同一室に相会して各自平素の所感を相語り傍ら先進の諸士に有益なる説話を乞ふとの習なりし」（「記事」『久徴館同窓会雑誌』第7号、37頁）とする演説会である。「之の二三ヶ月来は都合によりて一時閉会せしも去る十二日再たび開会し演説会を終るや直ちに始めしか久々にて館生一同に会したることなれは一入れ打解けて愉快に覚へたり之れより以后は毎月第二土曜日午后六時より開会すると定めり」（同前、37-38頁）とある。この号は1889(明治22)年1月27日発行なので、この記事に言う一致会は1月12日開催、それ以降「毎月第二土曜日午后六時」開会を定例としたようである。久々であったために盛り上がったということもあるようだが、中断していた一致会を再開させ、定例化を果たすことに寄与した演説を行ったのは誰あろう北条時敬である。

北条時敬は言わずと知れた石川県出身の教育家で、第四をはじめ第一と山口の高等中学校で教鞭をとり、校長を経たのち広島高等師範学校長、東北帝国大学総長、学習院長などを歴任する人物である。1858(安政5)年生まれの彼は当時満30歳、肩書きは「大学院学生理学士」となっている。彼の経歴を第四高等中学校時代に作成され現在に伝わっている職員履歴（金沢大学資料館所蔵『職員履歴　第壱輯』）によって追ってみよう。

北条時敬は1873(明治6)年1月満14歳の時から3年間金沢英学校で英学と数学を学び、10月には英学校助教として月給3円を受ける

ようになった。異例の俊秀といえるのではないだろうか。1876年2月に金沢啓明学校で漢学数学英学を学ぶとあるので、啓明学校の開校時の生徒にあたる。金沢英学校が廃止されて啓明学校（のち石川県中学師範学校）が設けられる制度改革のまっただ中を渡り歩いたことがわかる。啓明学校に入ったその月のうちにこれまた月給3円で助教として雇われ、さらに翌年には啓明学校公学員として月額2円の貸費生となった。啓明学校は生徒を公学員と私学員の2種に分けていたことが知られており、公学員は奨学生の扱いで、「品行方正、志操堅固、身体強健で読方や算術などの素養のある一八歳以上のもので、その定員は五〇名で学費は免除された」とされている（『石川県教育史』第一巻、305頁）。恐らく北条が18歳になったので公学員に適用されたのであろう。また、先行研究では公学員の学費（束脩と授業料）免除のことだけが書かれているが（同前書および田中智子「石川県の中学校形成史」（神辺靖光・米田俊彦編『明治前期中学校形成史　府県別編Ⅳ北陸東海』梓出版社、2018年、第2章、133-229頁））、彼の履歴を見る限り月額2円の貸費がなされていることがわかる。但しこれが公学員一般の話なのか、北条だけが特別だったのかは定かでは無い。

その後、貸費の条件であったのかも知れないが北条は1878年5月に20歳で石川県から在東京留学生を命じられた。上京した彼は箕作秋坪の三叉学舎に入り、数学と英学を学んでいる。翌年9月に予備門に入学、2年後の1881年9月に東京大学理学部数学科に入学した。順調な進学である。入学後の彼は1883、84年と連続して東京大学から褒賞給費金7円を得ている。そして東京大学理学部を1885年7月に卒業した彼は、すぐに月俸70円で石川県専門学校の教諭に就任した。10月に理学士の学位を授けられ、翌1886年2月には石川県専門学校長心得兼務を命じられ、4月に第四高等中学校教諭に就任し

た。1888年9月には第一高等中学校から月額40円の「物理及数学ノ校業ヲ嘱」されて第四高等中学校を辞職し、10月には東京大学大学院入学を許可されている。1890年9月には第一高等中学校で月額80円の報酬を受けるようになり、翌4月に正式に教授に就任し、年俸960円となった。正に学力と品行とによって恵まれた学習環境と職とを得ることの出来た生き方だったと言えよう。

さて、大学院学生の北条に戻ろう。『帝国大学一覧』によれば、「第六　理科大学学生及撰科生徒」の「研究科」の5番目に確かに「理学士　北条時敬　石川」と書かれている（『帝国大学一覧　自明治二十一年至明治廿二年』（帝国大学、1888年11月）232頁）。大学院生としての実態は不明だが、第一高等中学校で物理と数学とを教えながら、規程上2年間の在学が許される大学院に入学を許されて2か月が経とうとしている時に一致会での講演を引き受けたことになる。演題は「慎独ノ学問」である。「慎独」とは礼記の大学の一節「君子必愼其獨也（君子は必ず其の独りを慎むなり）」もしくは中庸の「君子愼其獨也（君子は其の独りを慎むなり）」からとった語で、「ひとりをつつしむ。誰も見てをらぬ所でも心を正しくする。己の身をつつしんで雑念の起らぬやうにし、天命の性に従ふこと程朱学者は特に学庸を尊び、慎独を修養上最も切要の工夫とした」（諸橋轍次『大漢和辞典』4巻、1142頁）と説明されている。

北条は「偖テ演題ハ慎独ノ学問ト申シマスカ都会ニ居ル学生ニハ殊ニ此学問ノ必要ヲ覚ヘマス」として演説を始めた。

> 凡ソ都会ハ文明ノ萃ヲ抜テ全国ノ雄ヲ聚ムルカ故ニ都会ニ居ル人ハ此ノ境遇ノ中ニ其視聴ヲ熟セラレ都会一種ノ気風ヲ為スハ亦タ己ムヲ得サル事デアリマス官吏ニハ大臣ヲ初メトシテ勅任官奏任官ヲ珍シトセス又富豪ニハ三井、岩崎ヲ準尺トシテ一万ヤ十

万ノ身代ヲ視ルコト公等碌々トシ一円ノ奮発ニテ団洲ノ妙左団次ノ快ヲ評シ円朝ノ人情話燕尾ノ軍談ハ銅銭五文デ買ヘル鉄道ハ四方ニ通シ汽船ノ便ハ横浜ヲ控ヘ新年ハ熱海有馬ニ年賀ヲ断リ土用休ミハ日光ニ避暑松島ニ納涼ニト行ク電気灯ハ丸心ノ「ランプ」ニ代リ蒸気暖室法ハ「ストーブ」ヲ斥ク

夫レ斯ノ如シ。サスガニ都会ノ盛観実ニ偉矣デハアリマセンカ実ニ偉矣デアリマスガ見ヨ此ノ偉ナル盛観ノ中ニ一帯ノ邪気ガ有ル

今其利ハ暫ラク之ヲ論外ニ置キ其害ノミヲ挙ケンニ耳目高尚ニ過キテ実力従ハス高談詭弁実行ヲ知ラス便利ヲ知ルニ従フテ気力沮喪シ気象乏ク奮慨セス貴フコトナク重ンスルコトナク信スルコトナク強ムルコトナク行為修飾ヲ専ニシ思想皮相ニ止マル此等ハ勿論端ヲ陳ヘタル者ナレトモ先ツ一般ノ気風ハ放逸軽浮ナルト思ハレマス

（続く）

体験的文献紹介(17)

―藩校・郷校・寺子屋の研究 ―

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

1965年3月、早稲田大学のO教授からすぐ来てくれという電話があった。O教授は原田実先生の後任として文学部教育学主任教授になっていた。話はこれまで教育学部のY助教授が日本教育史を担当してきたが、意見が合わぬから辞めて貰う。ついては君に4月から第一文学部の日本教育史を非常勤講師として担当して貰いたいということであった。これは面倒なことになったぞと内心思った。というのは第一文学部と教育学部は仲が悪いのである。とりわけ両学部にある教育学専攻教員は、一方は旧制大学哲学科の伝統を引くという自負があり、一方は新しい教育学だという気負いがある。また文学部のO教授は日教組講師団の有力者で名が通っており、教育学部の総帥・尾形裕康教授は大の左翼嫌いである。O教授が言うには教育学部から出講したY助教授は尾形先生の教科書を読むだけで大学の教育史講義に値しないという。すでに一年前から第二文学部（夜間）の日本教育史を講義していたから引き受けた。尾形先生は意外にもY助教授の後任をやれという。ただし最近出版した先生の『日本教育通史』を使用しろとの注文つきであった。こうした経緯で、65年4月から早稲田の第一、第二文学部で日本教育史を担当することになった。

早速、構想を練って、日本教育史の講義のノートをつくることにした。この頃には日本教育通史についての私自身の構想ができていたので述べよう。一口に日本教育史といってもどの時期に焦点を当てるか、人物中心か、思想か多岐に分かれる。尾形先生は過去のすべての文化の流れが現在に凝縮すると言うが抽象的でわからないし、佐藤誠実『日本教育史』が手本だとするが、文化史と教育史の境が見えにくい。私は師に逆らうようだが、現在の学校に至る祖形を各時代に求め、その流れと発達を考証するのが教育史だと思う。従って各時代の家庭教育だの、社会教育だのを研究対象にしない。ただし学校を構成する教師や教科

書、稽古等の祖形は探究する。要するにすべてを現代の学校に収斂させる教育史である。明治のはじめ西洋式近代学校をとり入れた時、校舎は、教師は、教科書は、授業は、と一つ一つ、過去のそれに目をつけ改良してつくり上げ、教育学研究が始ったことを想えばよい。従って私の教育史は奈良時代の大学寮や勧学院などの私学からはじまり、中世寺院での僧侶の学習、俗人の子どもを預かる登山から近世の藩校、寺子屋が明治の近代学校に展開する各時代の教育施設、教育機関を校舎、教室、教科書、教師、生徒という要素から考察し、その変遷を辿るというものである。すでに一年前から第二文学部で古代から中世までの教育史講義ノートはできているから近世近代へつなげようと考えた。この時、O教授は明治以後の近代教育史は自分がやるから君は江戸時代までで よいと妙なことを言った。数年後、O教授は『愛国心と日本の教育』を刊行した。天皇制が日本の教育をいかに悪くしたかという趣旨で、教育勅語からはじまり、学校の軍国主義化を叙述したものである。この頃、それをすでに講義していたか、原稿の執筆中であったかであろう。教育方法論の専門家で史料の扱い方を知らない人だから教育史の名に値しない俗書である。しかし私としては明治以降まで研究するには能力も時間も足りないからよい潮と思って承諾した。

早速、研究の標的を藩校、郷校、寺子屋に定めた。これらを調べるには『日本教育史資料』によらねばならぬのはわかっていたが、あの浩瀚な資料集を読み解くことは大変なことだし、第一、手もとにない。図書館で筆写するには時間がたりない。よって最も信頼できる研究書として石川謙『近世の学校』、宇野哲人・乙竹岩造編『藩学史談』、齊藤悳太郎『二十六大藩の藩学と士風』、笠井助治『近世藩校の綜合的研究』、石川謙『日本庶民教育史』、乙竹岩造『日本庶民教育史』全3巻を買い求めた。

『藩学史談』や齊藤悳太郎の著書は各藩の儒者の逸話が多いので講義の余談に用いたが、講義の骨格は石川謙と笠井助治の著書に拠った。石川謙は江戸期の歴史の流れの中で藩校が発達した様を類型的に叙述していてわかり易い。笠井助治の著作は斬新で、藩校の設置位置、建物の構造、間取り、教科書、講

義や議論、試験等、藩校を近代学校の視点で分析的に述べている。私が企図した教育史記述に合致するので有難く学ばせて貰った。『日本庶民教育史』という同書名の二つの書物は1929年という同じ年に出版されたものである。石川謙が主に『日本教育史資料』をもとに統計的手法を駆使して論述したのに対し乙竹岩造は勤務校の東京文理科大学の学生が帰省する際、アンケート用紙を配ってほぼ日本全国にわたる寺子屋の実態調査をしたものである。さらに古書店で『維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書』という稀覯(きこう)書を見つけたので雀躍(じゃくやく)して購入した。この書は明治25年、時の大日本教育会が杉浦重剛を委員長として東京市内に現存する寺子屋（この時は私立小学校と称した）を対象に旧時の実態と授業法を調査したものである。以上を基本文献として近世教育史の講義ノートをつくった。

藩校 （1）成立の状況（何時(いつ)、なにを契機に）、（2）位置と構造（城下町のどこに、江戸藩邸のどこに）、（3）経営（経費と教員の待遇）、（4）生徒と学習（生徒の身分、年齢、教科書、学習法）

寺子屋 （1）成立の状況（寺子屋の語誌、地域での違い、増加の時期）、師匠と経営（師匠の身分、月謝）、（3）寺子と学習（男女別、都市と農村の違い、手習、そろばんの稽古法、入門儀式、天神講等）

寺子屋は如上の文献だけでなく、歌舞伎の場面や台詞、文学や川柳に写実されているのでそれらを多く引用した。

郷校については石川謙の『日本庶民教育史』の第2篇第2章の「庶民教育機関としての郷学」、付編「藩学一覧」の中の「藩学の延長としての郷学一覧」「庶民教育のための郷学一覧」に拠った。後年、郷学研究が盛んになった時期があり、石川謙の郷学一覧よりさらに調査がすすんだ。それにつれて、いろいろな郷学論が飛びかい、石川の分類を超えた分類が提示されたが、私は石川の〝藩学の延長としての郷学〟〝庶民教育のための郷学〟という分類が正鵠を得ていると思

う。石川はその後亡くなるまで郷学一覧を補充し続けた。各種の教育学事典や教育史事典の「郷学一覧』にそれが見られる。郷学一覧表は未完結である。後進の研究者は新奇を衒(てら)って郷学論を争う前に郷学一覧表の完成に挺身すべきである。

私の近世教育史講義で欠けていたのは幕府直轄の昌平坂学問所と甲府、駿河、長崎など直轄地の学問及び蕃書調所、医学所及び洋式陸海軍事学校である。気づいてはいたが1965年の私の研究には能力と時間が及ばなかった。よって翌年、これらを講義に加えるべく学び研究した。昌平坂学問所については石川謙『学校の発達』がわかり易く、蕃書調所については大久保利謙『日本の大学』中の第2篇第3章の「蕃書調所」が明解である。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

いつもありがたいことに、幾つかの大学アーカイブズ関係施設から定期刊行物などを私個人にまで送っていただいていて、拝読して勉強になることがままあります。たとえば、桃山学院史料室さんから献本いただいた『桃山学院の歴史（歴史パンフレット）』（2020年、20頁）や『桃山学院年史紀要』39号（2020年、174頁）では、とくに橋爪麻衣調査研究員が報告されている「文学部が桃山学院大学にもたらしたもの～大学の挑戦と変化～」（泉大津市・桃山学院大学連携事業企画展、127～130頁）が、私にとってはなかなか興味深い内容でした。1989年の開学30周年に設置された文学部（2008年、国際教養学部に改組）の歩みを振り返る史料室の企画展内容に言及するもので、文学部開設にあたって、「当時深刻だった経営状態の回復の契機となる学部は何かと話し合われた結果、桃山学院高校の希望も加味し、外国語学部に近い文学部という構想が持ち上がった」（130頁）といいます。当時の桃山学院大学にとって、「経済・経営・社会の三学部に圧倒的に男子学生が多かった」（129頁）こともあり、進学率が上昇している女子学生の多数を獲得するための受け皿を新たに設け、その相乗効果として「女子学生が増えると男子学生も増えるという目算があった」（同頁）ともいいます。橋爪さんの弁によれば、1990年代半ばに、桃山大学は「史上最高の受験倍率と偏差値を誇る時代を迎え」（128頁）ますが、それが2000年代以降になると、「大学受験者数全体が減る傾向」（127頁）が顕著となり始め、「開設時に文学部を支えた教員の退官や転出」や「文学部のカリキュラム変更」などもあって、「文学部もかつての人気を失いつつあった」（同頁）そうです。文学部の改組にあたっては、危機感をもって大学でも協議を重ねたようですが、新設された国際教養学部の「カリキュラムから見ても、実際にはかなり色の違う学部」という評価もあって、卒業生の意見として「国際教養学部の卒業生たちのほうが社会に出てのびのびと活躍している」という声も挙がるいっぽうで、「文学部の卒業生には、『知らん間に文学部無くなってた』と受け止め」（同頁）る声もたしかに多いといいます。このような桃山学院さんの学部改組にもみられるように、大学史では立場や見方の違いによってその評価や受け止め方もかなり異なるという事例は実に多いものといえるでしょう。むしろ私は、そんな異なる違いも含めて、大学史というものを捉えたほうがよいと考えています。（谷本）

『長野県松本中学校長野県松本深志高等学校九十年史』（長野県松本中学校長野県松本深志高等学校九十年史刊行委員会、1969年）の第4章昭和前期を読んだ。早

期につくられた本格的な高等学校沿革史として有名な本書は、これまで事典的にしか活用してこなかった。この第4章では、以下の節で構成され、昭和戦前期の松本中学校が、校舎移転問題や医専との同居などで学校自体が揺れるなか、国家・社会で軍事色が強まっていくことを背景に、相談会・矯風会・応援団といった松中自治の伝統が変容を余儀なくされていく様子が描かれている。

第4章　昭和前期

第一節　時代の外観と松本中学校（577頁～598頁）

第二節　教育制度の諸問題（599頁～650頁）

第三節　校舎の改築と移転（651頁～676頁）

第四節　医専問題　（677頁～696頁）

第五節　松中自治の変容（697頁～847頁）

とくに印象に残ったのは第五節で、文部省や県当局からの圧力が自治変容の要因であったのではなく、時代の風潮のなかで生徒自らが変容させていった側面が史料にもとづいて紹介されている点である。例えば、矯風会総会で生徒達が定めた学校生活上のルールが、生徒自らの手によって厳格化（飲食店への立ち入りの全面禁止など）していった様子や、修養会（反省会）での下級生への上級生の指導が、戦時色が強まると学校側からの指示とはおそらく関係のないところで厳格化し、鉄拳制裁も用いられた。この沿革史を通じて教育における「自治」の多様な側面の一つに改めて触れることができた。（冨岡）

会員消息

８月のお盆のころに開催されていた、とある大学のオープンキャンパス（Zoom開校）を少し私も覗いてみましたが、コロナ禍のなかでも、大学で学ぶことの素晴らしさ・大切さなどを高校生らに対して熱心に呼びかけていました。ちょうど同じころに、東京新聞での戦後75年を迎えた戦争体験の企画コーナー「８月の窓」を目にする機会があり、なかでも1944年に東京帝国大学に入学して、航空工学を学び真摯に飛行機を造りたいと考えていた藤原祥三さん（現在95歳）の体験談「飛行機造る夢かなわず」（2020年８月19日）はとても印象深い記事でした。当時の藤原さんは、戦後に「宇宙開発・ロケット開発の父」とも呼ばれることにもなる糸川英夫先生のもとで学んでいたそうですが、時局にともなう戦時動員で、心ならずも糸川先生とともに無人飛行爆弾の開発に従事したといいます。当時の糸川先生は、「優秀な人が無駄に死んでいったのは堪え難い」として、「特攻だと、貴重な命が失われる。人が乗らないものを造るんだ」と話していたそうです。そして敗戦後、GHQの指示に基づいて航空機開発が禁じられ、航空機体学科も廃止され、藤原さんも物理工学科に転じました。大学卒業後、藤原さんは三菱重工で働きましたが、飛行機を造りたいという夢は戦争もあってかないませんでした。「どうしようもないが、残念だった。戦争というばかなことは…」と、戦後75年を迎えて藤原さんはそう語っています。（谷本）

去る2020年８月10日（月）に、日本デジタル教科書学会第9回年次大会において発表を行いました。発表内容としては、昨年度、勤務校にて実践した防災教育（震災モニュメント調査＆デジタル防災マップ作成）について、その一端を報告しました。
新型コロナウイルスの感染拡大を受け、初のオンライン（ZOOM）開催になりました。ZOOMを用いたことで、遠隔地にいても参加しやすいオンライン大会になり、筆者が発表した分科会においても、約50名の方が参加されていました。
お世話になった皆さま、ありがとうございました。来年度は、対面で研究発表やご相談、お話ができると嬉しいなと思っています。（八田）

後期の授業が始まりました。対面授業なので毎回、学生の体温チェックや座席の確認、授業終了後の消毒など、なかなか神経をつかいます。ひさしぶりに対面授業で立って話していたら、翌日、筋肉痛になりました。非常勤先の大学は、前期と同様、遠隔授業ですので、音声を録音しています。パソコンのまえでひとりごとを呟いているようでなんとも味気ないです。　（山本剛）

８月１７日、『中世イタリアの大学生活』の読書会を開催しました。出席者は冨岡・加藤の二人でしたが、気の置けない者同士で思い思いに話しをしました。既に聖職者としての地位を持っている学生や、富裕層の学生も多かったことで、ボローニャではなぜ教員よりも学生組合が力を持っていたのか理解できました。そのほか、自治には様々な形があることや（「権利を守る自治」や「教育における自治」は根本的に異なること）、中世ヨーロッパの都市生活には日常的に暴力が存在していたこと、学生組合の学頭が半端なくお金を持っていたことなど、初めて知ることも多くあり、楽しかったです。次回読書会は現在企画・調整中ですので、決まり次第お知らせします。（加藤善子）

仕事上必要な文科省がらみのセミナー、学会、今まで日程的・物理的に参加できなかった会合、興味がありながら会費や時間を惜しんで顔を出さなかった集まりなど、ウェブ開催を良いことにできる限り参加しようとエントリーをしています。しかし各イベントで前提としているテクニカルタームや話し方の文化に乗り切れないと集中力が追いつかなくなる体験もしばしば。会場という場に縛られることでこそ集中できるという事実は案外無視できないものだと痛感します。（小宮山）

やりたいことが多く、仕事などの用件と時間を奪い合っている状態で続いています。しかし、研究でも、仕事でも、私用でも、「やってよかった」と思うことが多いです。（冨岡）